

Contes Fantastiques Français du 19^e Siècle:
Jean Lorrain et d'autres.



紀田順一郎 | 荒俣宏
—— 責任編集 ——



小説集

A・K・トルストイ

他 川端雪男 編

Писатели Повести: Алексей Константинович Толстой и другие.

世界幻想文学大系……責任編集Ⅱ紀田順一郎＋荒俣宏
第三十四卷

ロシア神秘小説集

昭和五九年七月二五日印刷 昭和五九年七月三〇日初版第一刷発行

著者——A・K・トルストイ他

編者——川端香男里

訳者——川端香男里＋栗原成郎＋金澤美知子＋望月哲男＋西中村浩＋松橋薫＋斉藤陽一

発行者——佐藤今朝夫

発行所——株式会社国書刊行会

東京都豊島区巣鴨三―五―一八 郵便番号一七〇 電話〇三―九一七―八二八七 振替東京五―六五二〇九

造本者——杉浦康平＋鈴木一誌 協力Ⅱ佐藤篤司

挿画——渡辺富士雄

印刷所——凸版印刷株式会社＋セイユウ写真印刷株式会社

製本所——凸版印刷株式会社

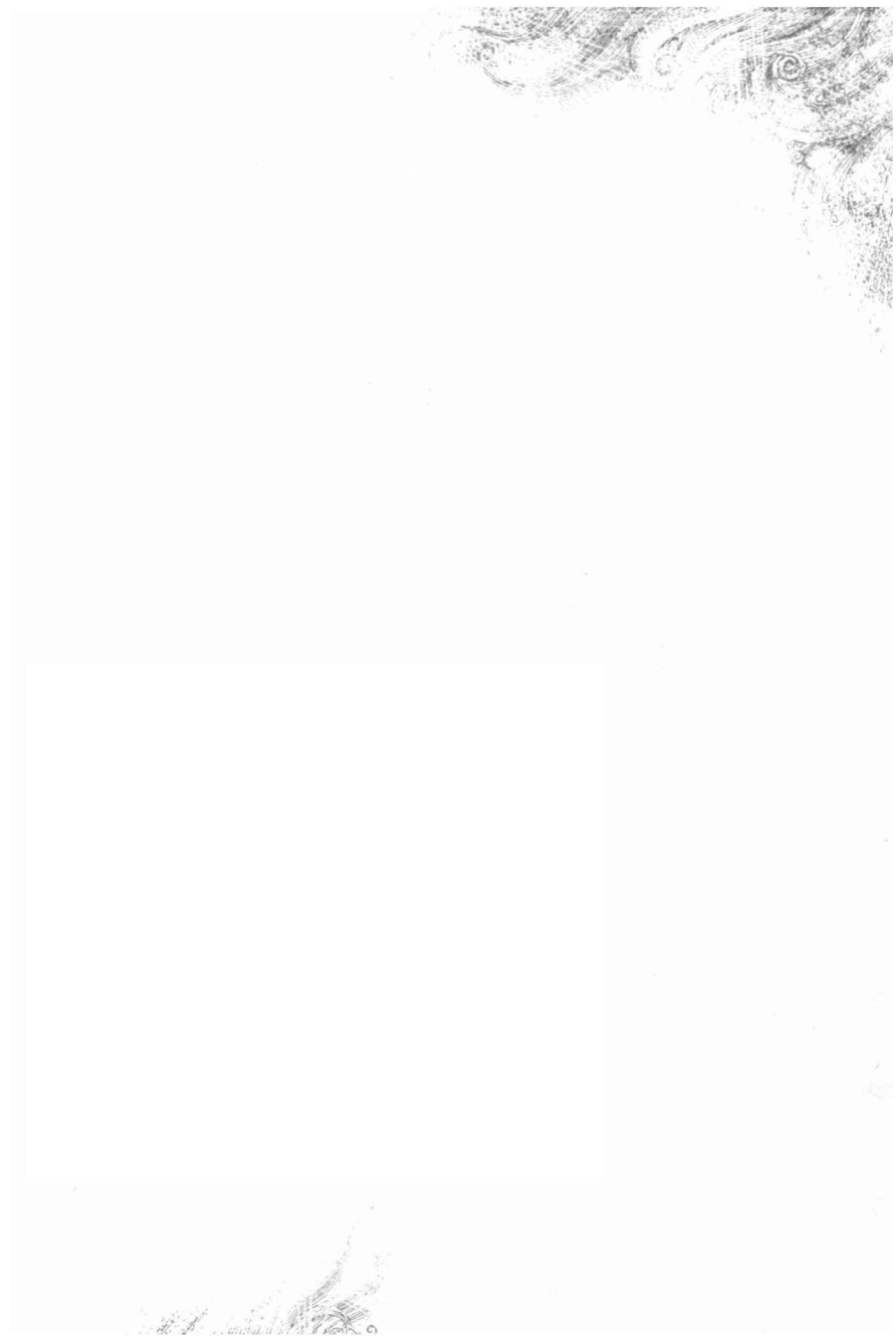
定価——三、〇〇〇円

●——落丁本・乱丁本はおとりかえします

ロシア神秘小説集

A・K・トルストイ他

——川端香男里 編



世界幻想文学大系——第三十四卷





7— ロシア神秘小説集

9— 吸血鬼^{クアイリ}——A・K・トルストイ——栗原成郎Ⅱ訳

115— 吸血鬼^{ブルダーク}の家族——A・K・トルストイ——栗原成郎Ⅱ訳

159— 三百年後の出会い——A・K・トルストイ——川端香男里Ⅱ訳

191— 恐ろしき占い——ベストウージェフⅡマルリンスキイ——金沢美知子Ⅱ訳

239— シルフィッド——オドーエフスキイ——望月哲男Ⅱ訳

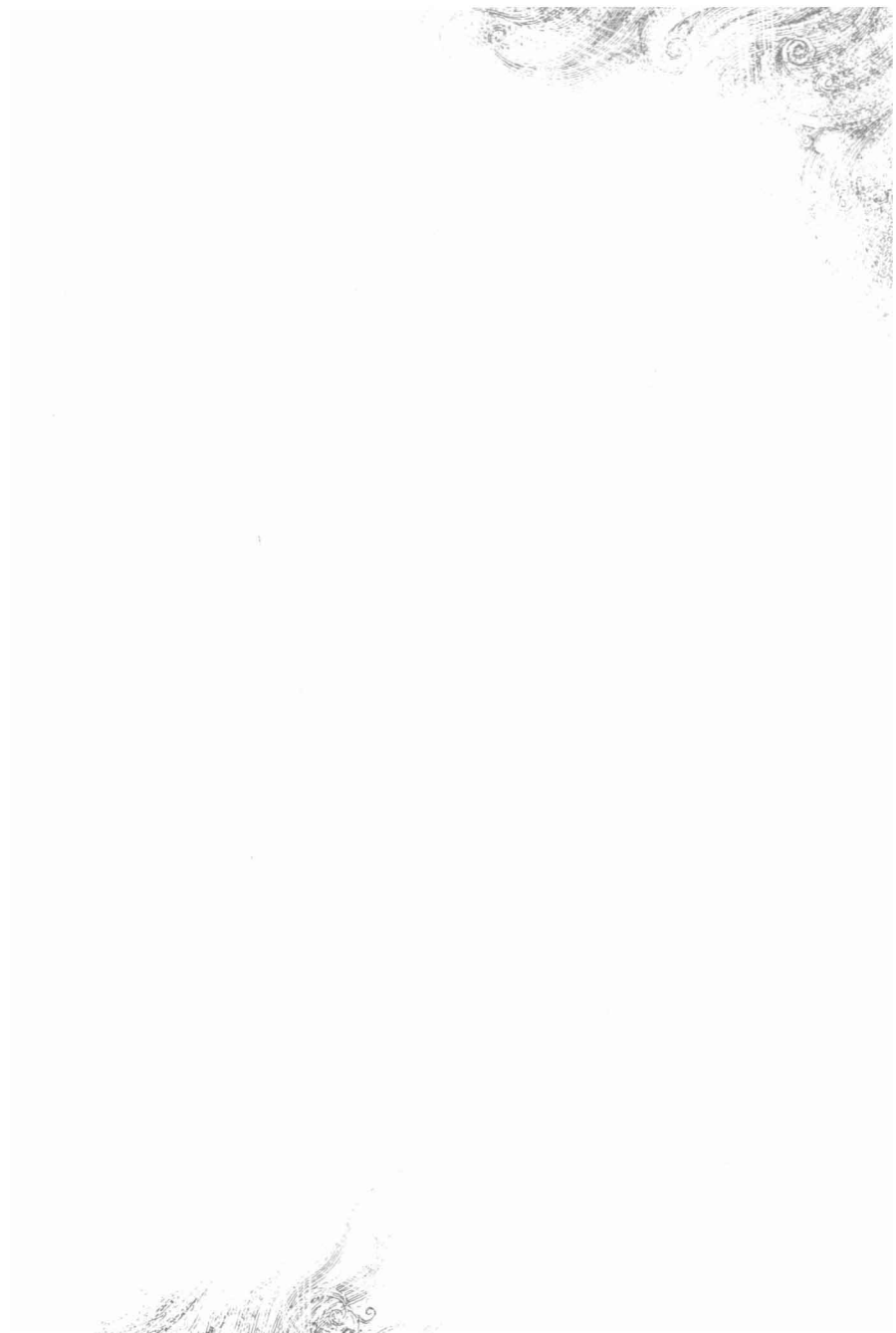
275— 思いがけない客——ザゴスキン——西中村浩Ⅱ訳

291— シトース——レールモントフ——松橋薫Ⅱ訳

315— 夢——トゥルゲーネフ——斉藤陽一Ⅱ訳

343— 解説……川端香男里＋栗原成郎





ロシア神秘小説集



吸血鬼

ウ
フ
イ
リ
.....
Алексей Константинович Толстой (1817—75)
アレクセイ・コンスタンチーノヴィチ・トルストイ
栗原成郎 訳



舞踏会は大入りだった。賑やかなワルツが終ったところで、ルネーフスキイはバートナーの婦人^{レディ}を元の席まで送り、自分はあちこちにさまざまな集団^{グループ}をつくっている客たちに目を配りながら、それらのあいだを縫うように部屋から部屋へと歩きはじめた。ひとりの、まだ若いと思われるのに、顔色の蒼白い、髪の毛がほとんど真っ白になっている男が彼の目に留まった。その男は暖炉の壁にもたれかかって立っていて、大広間の一隅に食い入るような視線を送っていたが、そのほうにだけ気をとられていて、自分のフロックコートの裾が火に触れて焦げはじめていることに気づいていなかった。ルネーフスキイはこの見知らぬ男の異様な様子に興味を感じて、この機を利用して彼と話してみようと思った。

「もし、あなた、どなたかをお捜しのご様子ですが、服が燃えはじめてますよ」と彼は言った。

見知らぬ男は振り向いて、暖炉から離れ、ルネーフスキイの顔を穴のあくほど見つめて答えた。

「いや、わたしは誰も捜してはおりません。ただ、わたしに不思議でならないのは、きょうの舞踏会にウブイリ^{ウブイリ}(吸血鬼)たちが姿を見ていることなんです」

「ウブイリですって？」とルネーフスキイは訊き返した。「どうしてウブイリが？」

「ウブイリ」と見知らぬ男はきわめてそっけない返事をした。「あなたがたは、それをどういうわけか知りませんが、ヴァムピール^{ヴァムピール}と呼んでおられるが、わたしはあなたがたにその本当のロシア語の呼び名をお教えることができます。それはウブイリ^{ウブイリ}です。吸血鬼^{ウブイリ}はヨーロッパのどこにでもありますし、アジアにさえいます。吸血鬼は純粹にスラヴ起源ですから、あらゆるものをラテン語風に直そうという気を起して、ウブイリをヴァムピールなどと呼ぶハンガリーの修道士たちによって歪められた名前を使おうとするのは、理由のないことなのです。ヴァムピール、ヴァムピール！」と彼は吐き棄てるような口調で繰り返した。「まあ、これ

も、もしわたしたちロシア人がブリヴィージェーニエ(幽霊)の代りに、ファントーム、あるいはレヴナントという言葉を使うのであれば、それと大同小異ですな！」

「しかし、ヴァムピールにせよウプイリにせよ、そういうものがここに来るとしたら、どういう姿で現れるのですか？」とルネーフスキイは尋ねた。

見知らぬ男は答える代りに手を伸ばして、ひとりの年輩の婦人のほうを指し示した。その婦人は別の女性と話を交しながら、その女性の傍らの席に坐っている若い娘に愛想のよい眼差しを注いでいた。話は、どうやら、その娘のことに触れているらしく、娘はときどき微笑みを浮べたり、顔を赤らめたりしていた。

「あのご老体をご存知ですか？」と男はルネーフスキイに尋ねた。

「あのかたは准将夫人のスグロービナさんです」とルネーフスキイは答えた。「わたしは個人的にはあのかたを存じませんが、たいへんなお金持で、モスクワの近郊に准将の美的感覚にはまったくそぐわないような素晴らしい別荘をお持ちだという話です」

「さよう、彼女は数年前まではまさしくスグロービナ夫人でしたが、いまや人間の生き血を吸う機会を虎視眈々と狙っているきわめて忌まわしい吸血鬼クフアイリそのものにほかなりません。彼女がああきの毒な娘さんを見ている様子をご覧なさい。あの娘さんは血を分けた孫娘なのです。あの婆さんの話していることを聞いてもらんなさい。婆さんは孫娘のことを誉めそやして、いまあなたがおっしゃった彼女の別荘へ二週間ほど遊びに来るように口説いているところですよ。しかし、三日も経たぬうちにあの不幸な娘さんが死ぬことは間違いないところです。医者たちは死因は熱病だとか肺炎だとか言うでしょう。しかし医者の言うことなど信じてはいけません！」

それを聞いてルネーフスキイは自分の耳を疑った。

「あなたは疑っていらっしゃるんでしょう？」とその男は話をつづけた。「しかし、スグロビーナ夫人が吸血鬼だということをわたし以上によく証明し得る人間は誰もいないのです。なぜなら、わたしは彼女の埋葬に立ち会ったのですから。もしあの時みんながわたしの言うことを聞いていてくれたなら、彼女は万一に備えて胸の真ん中にヤマナラシの木の杭を打ちこまれていたでしょう。だが、わたしの意見は一蹴されました。相続人が居合せなかったものですから、他人が容喙すべき問題ではないと片づけられてしまいました」

そのとき老婦人のところへ褐色のフロックコートを着て、髪をつけ、首に大型の聖ウラジミール十字勲章と四十五年間精勤勲章を懸けた風変りな男が近づいてきた。彼は両手で金箔の嗅ぎタバコ入れを持って、まだかなり離れた距離からそれを准将夫人に差し出した。

「あれも吸血鬼ですか？」とルネーフスキイは訊いた。

「間違ひありません」と見知らぬ男は答えた。「あれは五等文官のテレチャーエフです。彼はスグロビーナ夫人の大のお気に入りです、彼女よりも二週間早く死にました」

准将夫人に近づくとき、テレチャーエフは笑みを浮べて、踵と踵をバチンと打ち当てて礼をした。老婦人もまた笑みを浮べて、五等文官の嗅ぎタバコ入れに指を伸ばした。

「シナガワハギははいっているでしょうね、あんたさん？」と彼女は尋ねた。

「シナガワハギ入りでございますよ、奥様」と甘い声でテレチャーエフは答えた。

「聞きましたか？」——見知らぬ男はルネーフスキイに言った——「あれは、まさしく彼らがまだ生きていた時分に毎日の会話をはじめる際の合言葉ですよ。テレチャーエフはスグロビーナ夫人に会うたびに彼女のため

に喫ぎタバコ入れを持って行ったものですが、彼女はタバコをひとつまみ取る前にならずタバコにシナガワハギがはいっているかどうか訊くのでした。そしてテレチャーエフは、シナガワハギ入りです、と答えてから彼女の隣に坐ったものです」

「あなたは誰が吸血鬼^{ヴァンパイア}で誰がそうでないかをどうやって見分けられるのか、教えていただけませんか？」とルネーフスキイは尋ねた。

「それはなにもむずかしいことではありません。あの二人に関して言えば、死ぬ前の彼らを知っているわけですから、見まちがえるはずがありません。それで、わたしはあの二人が彼らをかなりよく知っている人々に混じっているのを見たとき、少なからず驚いたのです。ああいうことができるなんて、厚顔無恥にも程があると言わざるを得ません。しかし、あなたのご質問は、どうやって吸血鬼^{ヴァンパイア}を見分けるかということでした。吸血鬼^{ヴァンパイア}たちは互いに会おうと舌を鳴らしますから、それを覚えておけばいいのです。しかしそれは本当は舌を鳴らす音ではなくて、両唇でオレンジを吸うときに出る音に似たものなのです。それが吸血鬼^{ヴァンパイア}たちの合言葉でして、それによって彼らは互いに相手を見分け合い、挨拶を交すのです」

そのときルネーフスキイのところにはひとりの粹な身なりをした男が近づいてきて、彼に舞踏相手を決めるように注意を促した。ダンスをする者はすでにそれぞれ男女の組をつくっていたが、ルネーフスキイにはまだパートナーがいなかったもので、彼は、さきほど見知らぬ男が、もし祖母の招きに応じて別荘に行けば早い死が待ち受けていると予言した、あの若い娘を招こうと急いだ。ダンスのあいだ彼は、娘を注意して観察することができた。娘は十七歳ぐらいで、持前の美貌になにか非常にいじらしい表情があった。どこか深く秘めた憂愁が彼女の恒常的な性格を形づくっていると思われた。しかし、ルネーフスキイが彼女と話を交しなが

ら、なにかある話題の滑稽な一面に触れると、その表情は消え、それに代って、きわめて楽しい微笑が浮ぶのだった。娘の受け答えはどれも当意即妙であり、彼女の言うことも驚くほどしっかりしていて、しかも独創的だった。彼女の笑いは屈託がなく、彼女のたとばす冗談はまったく悪意がなく無邪気なものだったので、その冗談の対象にされた人々がたとえそれを耳にしたとしても、腹を立てることはできなかったにちがいない。彼女が考えを追いまわしたり、表現を搜し当てるようなことをせず、最初の言葉が突然生れると次の言葉が自然に続くような話し方をしてゐることは明らかだった。ときどき彼女は物思いに沈むことがあったが、そうすると再びあの憂愁の翳りが少女の額を曇らすのだった。快活な表情から愁いを含んだ表情へ、愁いを含んだ表情から快活な表情への移り変りが対照の妙を構成していた。彼女のほっそりとした軽やかな身体が踊っている人々のあいだに見え隠れしているあいだ、ルネーフスキイには、自分の見ているものがこの世のものではなく、詩人たちが歌っているように、月夜に蝶のごとくふわふわと花から花へ舞い遊ぶ空気の精であるように思われた。ルネーフスキイにこれほどまでに強い印象を与えた娘はいままでひとりもいなかった。彼は、ダンスが終るとすぐに、彼女に自分を彼女の母親に紹介してくれるように頼んだ。

スグロビナ夫人と話を交していた婦人は娘の母親ではなくて、叔母のひとりであって、苗字をゾリーナといい、娘はこの家で育ったということが判った。娘が孤児となって久しいということをルネーフスキイはあとになって知った。彼が見たかぎりでは、どう見ても叔母は姪を愛していなかった。祖母は孫娘を可愛がって、自分の宝物と呼んではいたが、その愛情が真心から出ているものであるかどうかは察しがつきかねた。娘にとってはこの二人以外に身寄りはこの世にいなかった。この薄倖な娘の孤独な境遇はルネーフスキイの同情をひとしお募らせたが、残念ながら、彼は彼女との会話をそれ以上つづけることができなかった。肥満